

## 要旨

ハイデガーとギリシア悲劇 — アイスキュロス『縛られたプロメテウス』をめぐって

秋富克哉（京都工芸繊維大学）

本発表では、1930年代に書かれた3つのテキストをもとに、ハイデガーによるアイスキュロス『縛られたプロメテウス』への言及を検討する。言及はいずれも断片的であるが、各々をその思想的文脈およびハイデガーの思想展開の全体から照らし返し、さらに3箇所を関連づけることで、この作品がハイデガーにとって持つ意味を明らかにしてみたい。それは、単に古代の一悲劇作品の解釈ということにとどまらず、ハイデガーのおそらくは最も問題的な時期の思索に接近するのを目指してのことである。以下、3つの歩みについて概観する。

### 1. 悲劇への洞察と原初としてのプロメテウス — 「黒ノート」における

「黒ノート」最初に収められた「目配せ×考察（Ⅱ）と指示」の断章178には、ソポクレスの『アンティゴネー』の表題とともに、後に通称「人間讃歌」の解釈の中で注目される「デイノン」への言及がある。このことは、1930年代の初め、既にギリシア悲劇への関心が動いていたことを示している。そしてその関心を映すかのように、程近い断章219に、プロメテウスの名前がアイスキュロスの名前とともに現われる。その断章は、「プロメテウス（アイスキュロス）と哲学の原初」、「原初と世界の性起（Weltereignis）」、「世界の性起と人間的現有」、「現有の歴史と有の本質歪曲（Verwesung）」というように、4つの対句が並べられただけの構成だが、各対句の後半の語が次の対句の前半に配されており、全体が一つの連関を持っていることは明らかである。ここでは、その連関を確認しながら、特に、アイスキュロス悲劇のプロメテウスが原初と結びつけられていることの意味を、同時期の他のテキストをも参照しながら明らかにしたい。

### 2. 知（学問）と運命 — 「ドイツの大学の自己主張」における

悪名高い学長就任講演は、プロメテウスへの言及として最も有名なものであろう。学問とドイツ民族の運命との繋がりを求める哲学者の学長は、学問の本質を問うに際し、学問が存在すべき条件を求めて、そもそも西洋的学問の始まりとなったギリシアの原初に立ち帰ろうとする。そこで引いてくるのが、アイスキュロスがプロメテウスに語らせた、「テクネーはしかし、必然よりも遥かに無力である」という言葉に他ならない。ハイデガーはこの言葉を、知と運命の関係として捉え返す。ただし、運命に対する自らの無力を語る時、知は既に運命との関係を自らのうちに受け止めている。ハイデガーによれば、「運命に対する知の無力」を自覚する知こそが、ギリシアの原初を特徴づける。この知における本質的な無力を現代において経験することが肝心となる。それは諸学問の課題であるべきだが、専門化し技術化した諸学問にそのことを求めることはできない。むしろ、その事実を含めて事態を究明することこそが、哲学の課題となる。ドイツの大学の本質への根源的な意志は、知が無力化した事態そのものを、現代における学問ないし知の運命として受け止めなければならない。それはドイツ民族に負わされた運命でもあるが、この民族の運命は、知や学問の運命が哲学の運命に繋がることで、原初以来の西洋の運命に通じている。ここにおいて、「運命」概念が、『有と時』において本来的歴史性

として捉えられた内実を超えているのは明らかであろう。「運命」概念は、『有と時』において「共同体、民族の生起」として語られながら未展開に終わった「歴史的運命 (Geschick)」概念とともに、1930年代以降のハイデガーの思索を導くことになる。「ドイツの大学の自己主張」でのプロメテウスへの言及は、そのような射程を含んでいるのである。

### 3. 火と真理 — 『省慮』における

三番目の言及箇所は、1938-39年に書き記された覚書き『省慮』の第51節「有と人間」である。そこには、火とテクネー（技術知）というアイスキュロス悲劇の基本モチーフが、アレーテアとしての真理の立場から受け止められている。すなわち、1930年代以降顕著となる新たな歩み、「真理の本質」への問いがプロメテウス解釈に映っている。アレーテア（非覆蔵性）が本質的に覆蔵性を蔵しており、言い換えれば、真理がそれ自身のうちに「迷い (Irre)」としての非真理を含むとする本質理解は、原初の知としてのテクネーもまた、原初がその原初性を喪失していく動性に応じて、この時期の技術理解を特徴づける「工作機構 (Machenschaft)」に変貌していくこととパラレルである。

真理の本質の理解から、原初に始まる有の歴史が見られることで、3つのテキストに跨がるプロメテウスへの言及は、30年代における基本的立場において結びつくのである。

最後に、ハイデッガーにとってのプロメテウスの存在について一言付け加えるとともに、本発表の主題の射程を示して、全体を締め括りたい。